

臓器提供に関する院内教育とチームづくり

2017年に内閣府広報室が「移植医療に関する世論調査」を実施している。そのなかの「あなたは、仮に、ご自分が脳死と判定された場合またはご自分の心臓が停止し死亡と判断された場合に、臓器提供をしたいと思いますか」という設問において、「提供したい」が41.9%、「どちらとも言えない」が33.1%、「提供したくない」が21.6%であった。この結果から、わが国においては、脳死下臓器提供がまだ十分に受け入れられていない状況にあると考えられる。

本項筆者の所属する伊勢赤十字病院（以下、当院）において、18歳以下1例を含む4例の脳死下臓器提供を経験した時点で、院内に臓器提供に対する意識が根づいているかを確認するために、全スタッフ1,225名を対象としたアンケートを実施した。その結果、10%は臓器提供に反対であり、臓器提供の現場にかかわりたくないと答えた看護師は35%であった。このように、臓器提供のために診療・ケアを行うことに抵抗があるスタッフも少なくないのが現実である。

であるからこそ、臓器提供を実現する体制の構築においては、「必要だから」という一言で強引に進めることなく、種々のスタッフが協調して取り組めるように努めるべきである。臓器提供に対するスタッフ教育やチームづくりは、体制構築を進めるための重要な土台となる。

1 臓器提供にかかわるチームメンバーに対する教育

できるかぎり多くのチームメンバーに専門研修を院外・院内で受けてもらうことが重要である。JOTのホームページや都道府県Coへの問い合わせで情報を得て、JOT主催の研修会や日本救急医学会など各学会が主催するセミナーを活用するとよい。

例えば当院の場合、院内体制を構築しはじめた段階では臨床検査技師が臓器提供に否定的であった。しかし、JOT主催の「救急医療における脳死患者の対応セミナー」に参加したことで臓器提供に対する意識が変化し、脳波検査に関してさまざまな工夫を行ってくれるようになった。臓器提供にネガティブな印象を抱いているスタッフにこそ、専門的な研修に参加する意義があると思われる。その後も当院では、大阪大学のエクステンション講座「移植医療システム特論」を含め、専門的な研修に看護師長や臨床検査技師、医師に参加してもらっている。

とくに看護部門では、患者や家族から移植治療や臓器提供についての相談を受ける可能性がある脳神経外科、救命救急病棟、集中治療室、小児科病棟、透析治療室、手術部の看護師長などが研修を修了した。看護師長は、患者や家族と接する機会の多い若手看護師たちの相談者となるべき立場にあり、移植医療や臓器提供に関する知識を備えていることが望まれる。また、研修を受けた看護師長は脳死とされうる状態となる可能性のある患者に対してより注意を向けられるようになり、そ

の発生時には速やかに臓器提供対策室に報告が上がるようになってきている。各主要部門に専門研修を修了した看護師長が配置されていることで、家族への情報提供の機会を失うことが少なくなる。

家族への情報提供に関しても、臓器提供対策室が状況をいち早く把握することで、主治医と協議し臓器提供対策室のメンバーが実施することも可能になる。臓器提供の手続きが進行しても関連する主要部門に研修を受けたチームメンバーが配置されていることで、大きなトラブルが発生することなく連携できる。また、臓器提供に関する知識のあるリーダーが現場にいることにより、経験のないスタッフのストレス軽減、安心した対応につながる。

このように当院では、関連する各部門のリーダーが臓器提供の専門研修を受けることで各部門のスムーズな連携を保ち、そのほかのスタッフをサポートできるチームを形成した。

2 施設全体の意識を高める教育

臓器提供の迅速で適切な進行には、施設全体で移植医療に対する理解を深めていることが重要である。なぜならば、臓器提供例が発生すると、各種委員会の緊急招集、生理検査部門の体制、集中治療室の体制、手術部や麻酔科の体制など、予定されていた通常業務に少なくない影響が出るためである。この際にスムーズな協力を得るためには、院内勉強会が必要である。例えば、移植医療にかかわる専門医の講演や、研修を積んできた院内コーディネーターの講演、あるいは実際に臓器提供を経験した家族や臓器移植を受けた人の講演などである。都道府県 Co に問い合わせ、講演していただける人を紹介してもらうのもよい。

例えば当院では、自施設で脳死下臓器提供を希望されながらも病状の問題から心停止後の腎提供に終わった患者の家族や、18歳未満の子どもの臓器提供を実現された患者の家族に、当院での対応内容をふまえてご講演いただいた。これにより、その患者・家族に直接関与したスタッフだけでなく、ほかのスタッフにも臓器提供に対する前向きな気持ちが生まれたと考えている。また、心臓移植を受けた患者の講演から、移植を待つ間の思いや移植前後の生活の変化といった実情を知ること、臓器提供推進への思いを強くしたスタッフも数多くいた。

医療関係者の講演だけでなく、患者や家族の思いを直接聞くことは、移植医療・臓器提供に対する意識を院内に根づかせる大きな原動力になる。臓器提供にむけた体制構築がまだの施設では、ぜひ臓器提供を経験した家族や移植を受けた人の講演を、院内研修として開催していただきたい。

3 チームづくりはマニュアルづくりから

「チームづくりはマニュアルづくりから始まる」といっても過言ではない。マニュアルは、十分な知識をもっていないスタッフであっても対応できるように、細部にわたり丁寧に作成されなければならない。すなわち、多職種の通常業務にも目を向けて、多部門の情報を共有しなければ丁寧なマニュアルは作成できない。そのために、マニュアル作成時から関連する多職種にチームとして参加してもらうことが重要である。

例えば当院では、マニュアル内にできるかぎり細かいタイムテーブルを組み込み、各職種ごとにどのようなタイミングで関与しなければならないかの目安を示している (p.●参照)。このタイム

テーブルを確認することで、通常の予定業務に従事する時間を確保しやすくした。18歳未満の臓器提供事例用のタイムテーブルには、虐待防止委員会の開催や児童相談所などへの問い合わせといった、小児特有の欠かすことのできない手続きに関するタイミングも記載している。

誰もがすぐに理解することのできる丁寧で詳細なマニュアルを作成するためには、前述したとおり多職種がその作成にかかわって各部門の情報を共有することが必要であり、その共有がチームづくりの基礎ともなる。各部門の情報と臓器提供の専門知識を共有するチームリーダーたちがマニュアルを丁寧に作成すれば、一度でも臓器提供を経験したスタッフは難しい印象を受けず、施設全体が臓器提供に前向きになって進んでいく。患者や家族の思いを無駄にすることなく、臓器提供を的確に進行することができる施設になるはずである。

4 代理受傷に対するケア

まず、「代理受傷」とは精神的用語である。いわゆる「二次受傷」のことであり、辛い体験を見聞きした者が、実体験者と同様の感情的・身体的苦痛を体験することを指す。犯罪にかかわった警察官や災害にかかわった救助隊員、患者に向き合った医療スタッフなどによく発生する。「共感疲労」と表現されることもある。

臓器提供において、患者・家族のケアとサポートのためにMSWや臨床心理士を配置しておくことは重要である。しかし、臨床心理士の役割は患者・家族に対することにとどまらない。患者・家族の傍に寄り添って話を聞く医療スタッフも、患者・家族と同様に精神的ショックを受けて、通常の診療やケアで感じる以上のストレス反応を生じることがあり、そのようなスタッフのサポートも臨床心理士の重要な役割となる。

実際に当院では、臓器提供終了後の数日以内に、チームメンバーの臨床心理士が、臓器提供にかかわった看護師を中心に無記名のアンケートを実施して全体のストレス状況を把握するとともに、代理受傷で強いストレスを感じているスタッフには個人面談の機会を設けてサポートしている。とくに小児の臓器提供では、自分自身の子どもと患児を重ねてしまうスタッフが多いことに注意すべきである。

このように、通常の医療以上に、臓器提供に携わったスタッフはストレスを感じている。ストレスを感じているスタッフに対しては理解を示し、ケアを実践しなくてはならず、臨床心理士は提供終了後も重要な役割を担うことになる。スタッフの心理的ストレスに対するケアは、臓器提供に対するネガティブな印象を軽減し、施設の臓器提供に対する意識を維持することにもつながるため、チーム全体の重要な役目である。

5 シミュレーションの重要性

成人例の臓器提供を経験した施設であっても、小児例では異なるところがあるため、小児例としてのシミュレーションを実施すべきである。シミュレーションを行うことで、臓器提供の流れの確認はもとより、各職種が自らの役割をイメージすることができ、些細な間違いなどの発見にもつながる。

一方で、臓器提供の件数が決して多くないわが国の現状を考えると、シミュレーションの大きな目的の一つは、チームの連帯感と施設の臓器提供に対する意識の維持にある。シミュレーションの実施も院内教育の一つと考えて、2～3年に1回程度は開催することが望ましい。

6 まとめとして

脳死下臓器提供に関しては、たとえ医療従事者であっても全員が受け入れているとはいえないのが現状である。そのため、臓器提供に携わるチームのメンバーは、全スタッフに対して協調性を持ち、丁寧に進めていくことが肝要である。臓器提供には多部門の連携が必須であり、また、件数自体が少ないことから慣れないスタッフへのサポートも重要である。そのためには、臓器提供に関する知識を備えた各部門のリーダーを育成しておくことが肝要であり、専門知識をもった多職種からなるチームは、臓器提供に対する気風を施設全体で高めることができる。そして、「命をつなぐ」医療に参加できる尊さを分かちあい、継続しようとする土台が施設につくられることになる。